

「リゼットの みどりいろの くつした」

よくはれた あるひ、
リゼットは おさんぽに でかけました。

すこし あるいたところで、くつしたを を見つけました。
それは とてもかわいい みどりいろの くつしたでした。

「やったあ、」と リゼットは おもいました。
「こんな すてきな くつしたが おちているなんて めったにないわ！」
リゼットは その くつしたを はいて、げんきに あるきだしました。

すると、トムキャットと ティムキャットに であいました。
その ねこのきょうだいは、リゼットを からかうのが だいすきです。
「みて、わたしが 見つけたのよ！」リゼットは とくいげに 言いました。
「一まいだけ！ まぬけだなあ、リゼット。じゃあ、もうかたほうは どの
い？
くつしたは 二まいそろえて はくんだよ。そんなことも しらないのかい？」

「ああ、そうよね、」リゼットは 言いました。「二まいそろえて はくのね。
もうかたほうを さがさなきゃ。」

リゼットは 一ばんたかい木に のぼりました。そこからは、
なんでも みえるのです。でも ざんねんなことに、
いくら 目を おおきく あけても、くつしたは どこにも みえません。
「わかった！」リゼットは おもいつきました。「うみに おちているんだわ。」
リゼットは あわてて 木から おりると、うみべへと いそぎます。

つめたい 水^{みづ}のなかに あたまを つっこんだ リゼット。
そこへ、一^{いっ}ぴきの さかなが とおりかかりました。もしかしたら リゼット
を たすけてくれる かもしれません。

「こんにちは、おさかなさん。くつしたを みなかった？」

「ううん、」と さかなは 言^いいました。「でも みて、とつても おおきな コ
ーヒーポットと、ちいさな くま^て手を みつけたよ。

すごいでしょ。うみには なんでも おちているんだから！」

「そのとおりね。」リゼットは ためいきを つきました。「わたしが さがし
ている くつしたは ないけどね。」

がっかりした リゼットは いえに かえることにしました。

「まあ リゼット、どうして そんなに かなしそうなの？」おかあさんが き
くと、

「くつしたを みつけたの。」と リゼットは 言^いいました。「でも 一^{いち}まい だ
けじゃ だめなの。二^にまい ないと だめなのよ。」

「そうね。」おかあさんは 言^いいました。「くつしたは 二^にまい そろえて は
くものよ。くつの ようにね。あらって あげるから かしてごらん。みち
に おちていた くつしたは はかないほうが いいわ。よごれているから
ね。」

リゼットは すわって、くつしたが かわくのを まっています。

「あれは きみの ぼうし？」

リゼットが ふりむくと、ともだちの パートがいました。

「ぼうしじゃないわ。」リゼットは 言^いいました。「くつしたなの」

「そうなんだね！」と パートは 言^いいます。「どっちでも いいけど、ぼくは
そんな ぼうしを かぶることを ずっと ゆめみていたんだ。かぶってみて
もいい？」

「もちろん、いいわ。」

リゼットは おもわず わらってしまいました。「わたしの くつした にあっているわ！」

「そうでしょ、」バートは 言います。「すばらしい ぼうしに なるよ。」

「そうね。ニまい あったら かたほう あげるのに。」と リゼットは 言いました。

そのとき、トムキャットと ティムキャットは、しのびあしで いえのまわりを こっそり あるいていました。

「ピンポン！」ティムキャットが おおごえで 言いました。

「ほら、みつけたよ、リゼット…。きみの もうかたほうの くつした！」

「どこに あったの？」と リゼットが たずねました。

しかし ねこのきょうだいは こたえません。

きょうだいは さけびながら にげていきました。「とりに きてごらん！」

リゼットと バートは ひっしに あとを おいかけます。

「ヒュー！ あいつら ちいさいのに よく はしれるなあ」と ハーハーしながら トムキャット。

「それでも くつしたは わたさないよ。」と ティムキャット。

「ポチャン！」

リゼットと バートは、いきをきらしながら おいつきました。

「さあ、」と リゼットは 言いました。「くつしたを ちょうだい。」

「くつただって？ もう ないよ。ほらね？ とんでいっちゃったんだよ」

バートは リゼットの そでを ひっぱります。

「しかたないね。あの ねこのきょうだいは いじわるで

うそつきなんだよ。くつしたが とべるはずないよ。」

「ひどいわ、」リゼットは 言いました。「^{ふた}二つめの ぼうしは もうないわ。
でも わたしのを、もうすこし かぶっていても いいわ。
いえに かえったら かえしてね。」
「やさしいね。」バートは とても ちいさな こえで 言いました。

いえに かえると、びっくりです。リゼットの おかあさんが あたらしい く
つしたを ^{いち}一まい あんできていたのです。それは みどりいろで、もうか
たほうの くつしたと まったく おなじでした。
リゼットは うれしくて とびはね、おかあさんに だきつきました。

「それを あたまに かぶるの？」
おかあさんは たずねます。「バートみたいに？」
「そうよ。」リゼットの ^め目は かがやいています。
「これで ふたりとも おそろいだね！」
バートは うれしくなって おどりだしました。

ねる じかんになり、バートは いえに かえりました。
リゼットは ぼうしを かぶったまま、ねむろうとしています。
そして、ともだちのことを かんがえています。バートも ぼうしを かぶっ
て ねていることでしょう。リゼットは ぜったいに そうだと おもって
います。

しかし、^{いち}一ばん しあわせな よるを すごしているのは おさかなさんです。
ちいさな くま手、^で大きな ^{おお}コーヒーポット、そして なによりも じぶんに
ぴったりの みどりいろの ねぶくろを みつけて、とっても よろこんで
いるのですから。

END

こんな すてきな くつしたは、
めったに ないわ！